

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号： 12501
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2023～2023
課題番号： 23H05004
研究課題名 園庭の登はん型遊具における幼児の挑戦過程の展開と安全上の配慮の検討

研究代表者

根橋 杏美 (NEHASHI, Kyomi)

千葉大学・教育学部附属幼稚園・幼稚園教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000円

研究成果の概要：本研究は園庭の登はん型遊具における幼児の取組状況の変化や影響要因について明らかにし、安全上の配慮の具体的な内容を検討することを目的とした。4歳男児2名(達成児A・挑戦児B)を対象とした行動観察から43取組14事例得られた。取組状況及び平均取組時間の推移を分析し、登り場面の挑戦行動から行動ラベルと発話ラベルを生成した結果、9～3月にかけて取組む登り口の数が増え、試行錯誤して挑戦する姿からより速く確実に登り降りする姿に変化することが明らかになった。これらの変化には、周囲への関心や気の合う友達との継続的な取組が影響要因となっており、幼児の挑戦を見守る保育者の援助及び環境構成の有用性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、幼児の挑戦と安全の両立を目指して改修された全国的にも珍しい登はん型遊具における幼児の取組に着目し、先行研究にはない取組状況の変化や影響要因を明らかにした。近年の国内の幼稚園等では、戸外環境の改善や再構成が課題とされ、園庭遊具を改善する園が増えている。本研究は、幼児の挑戦と安全の両立を目指した改修遊具における幼児の挑戦行動を解明し、幼児の挑戦を見守る保育者の援助及び幼児の挑戦を安心して見守ることが可能な環境構成の有用性から安全教育の在り方を示した点において、学術的意義と社会的意義を有する。

研究分野： 保育学

キーワード： 挑戦的活動 幼児 登はん型遊具 挑戦過程 園庭遊具 安全教育

1. 研究の目的

本研究の目的は、園庭の登はん型遊具における幼児の取組状況の変化や影響要因について明らかにし、安全上の配慮の具体的内容を検討することである。令和2年度の研究(JSPS 科研費 JP20H00721)と令和3年度の研究(JSPS 科研費 JP21H03891)では、「登はん型遊具」を対象に、リスクテイキング能力の育成との関連や保育者の援助の背景等を明らかにした。令和3年度の研究から、保育者は幼児一人一人の取組や心情を捉え、幼児に応じた意図により内容を判断していることが示されたが、幼児一人一人の取組の詳細は明らかでない。幼児期は生活経験や発達等の個人差が大きい時期であることを踏まえ、本研究では、幼児の取組の時間的变化に着目した行動観察を行うこととした。

2. 研究成果

【目的】園庭の登はん型遊具における幼児の活動を「挑戦的活動」とし、幼児の取組状況の変化や影響要因について明らかにし、安全上の配慮の具体的内容を検討することを目的とする。

【方法】調査対象児：登はん型遊具が設置された調査協力園 X 園の4歳児男児2名。本研究は幼児の「挑戦的活動」の変化を捉えるため、令和2年度の研究成果を踏まえ、「達成」「挑戦」「接触」の3取組のうち「挑戦」の取組が最も多い4歳児を対象とした。また、取組の時間的变化を捉えるため、調査期間のうち9月と3月の双方で複数回取組がみられた取組状況の異なる2名(達成児A, 挑戦児B)を対象とした。期間：2023年9月～3月までの全14日間のうち、調査対象児の取組がみられた9月と3月の5日間(9月3日間, 3月2日間)。登はん型遊具の老朽化により7月に遊具が改修されたことから、構造等の条件を同一にするため、観察は9月以降に実施した。倫理的配慮：調査協力園 X 園の園長及び副園長に目的や倫理的配慮等を説明し、同意を得た。また、千葉大学教育学部生命倫理審査委員会の承認を得て実施した。調査手続き：令和2年度の研究成果を踏まえ、調査対象遊具の5か所の登り口のうち4歳児の取組が多い《丸太》《斜面(園舎側)》《デッキ》の3か所にカメラを設置した間接観察による、記録映像を用いた行動観察を行った。得られた記録映像から「調査対象児が登はん型遊具の各登り口に触れてから、成否を問わず、地面に着地かつ移動し離れるまで」を1取組とし、「日時」「登り口」「取組状況」「開始/終了時間」「時間の長さ」「エピソード(取組内の具体的行動)」を記録した。カメラを設置していない《壁》《斜面(砂場側)》《ポール》の取組については、記録映像の音声から明確に判別できた場合1取組として記録した。分析手続き：9月と3月の取組内容の時間的变化を分析するため、「取組状況(「達成」「挑戦)」から、2名の対象児の取組状況を比較した。また、「時間の長さ」から平均取組時間を算出し比較した。さらに、連続する複数の取組及び「エピソード」のまとまりを1事例とし、「行動または発話の意味内容が変化した場合に区切る」仕方で、「行動ラベル」と「発話ラベル」を生成した。行動と発話の意味内容が同時に生起している場合は区切らず双方のラベルに分類し、9月と3月の展開過程を比較した。発話は発話内容カテゴリー(根橋・砂上, 2022)をもとに分類した。

【結果と考察】得られた取組数は全43取組で、達成児Aが26取組(達成18, 挑戦8), 挑戦児Bが17取組(達成10, 挑戦7)であり、計14事例得られた。そのうち10事例は達成児Aと挑戦児Bの相互作用がみられ、4事例はA児のみの取組であった。「達成」の取組数が2名共に多いのは、「挑戦」より短時間で取

表1 調査対象児の取組状況

	達成児A		挑戦児B	
	9月	3月	9月	3月
丸太			挑戦	降りのみ
園舎側	挑戦		×	
デッキ	挑戦	挑戦	×	×
壁	降りのみ	降りのみ	×	降りのみ
砂場側	×	×	×	降りのみ
ポール	×	降りのみ	×	降りのみ

：登り降り共に「達成」を示す。
×：「未達成」または取組がみられなかったことを示す。

表2 登り場面における平均取組時間(秒)

	達成児A		挑戦児B	
	9月	3月	9月	3月
丸太	328	7	—	314
園舎側	23	2	38	6
デッキ	48	1	71	1

小数点以下は四捨五入した。表の内は取組数を示す。

表3 登り場面の行動内容の分類とその数

グループ	行動ラベル	達成児A		挑戦児B	
		9月 (n=59)	3月 (n=17)	9月 (n=67)	3月 (n=11)
挑戦 (n=108)	接触	4	2	6	2
	挑戦(単発)	12	5	9	2
	繰り返し挑戦	10	0	11	0
	達成方法の模索	0	0	7	0
	挑戦の中断	2	0	9	0
	挑戦の終結	6	1	5	0
	達成	4	6	0	5
計		38	14	47	9
他児との 関わり (n=46)	他児の取組を見る	7	0	5	0
	他児を待つ	6	0	8	1
	他児に譲る	4	0	4	1
	他児に譲らない	1	0	0	0
	他児の取組に割り込む	0	1	3	0
	周囲の活動を見る	3	1	0	0
他児に取組を見せる	0	1	0	0	
計		21	3	20	2

組が繰り返されていたためである。以下では、表1~3より得られた各幼児の取組特徴と変化を分析し、各幼児の特徴と変化が顕著にみられた3事例から取組の変化の影響要因を考察する。

(1)達成児A：達成児Aは、9月時点で《丸太》からの登はんに「達成」しており、《デッキ》に「挑戦」していたが、3月になると《斜面（園舎側）》からの登はんに「達成」し、《デッキ》への「挑戦」を継続しながら《壁》や《ポール》から降りるようになった(表1)。9月には《丸太》からの「達成」及び「挑戦」に平均328秒(min26~MAX703)かかっていたが、3月には《園舎側》から平均38秒(min31~MAX42)で登っていた(表2)。また、9月には【達成方法の模索】【挑戦の中断】が少なく、【他児の取組を見る】【周囲の活動を見る】ことが多く、他児や周囲の遊びへの関心の高さが伺え、3月には3歳児に登り方を教えるなど、【他児に取組を見せる】姿もみられるようになった(表3)。

(2)挑戦児B：挑戦児Bは、いずれの登り口からの登はんも未達成で、《丸太》からのみ「挑戦」していたが、3月には《丸太》ではなく《斜面（園舎側）》からの登はんに「達成」し、《デッキ》以外から降りるようになった(表1)。9月には《丸太》への「挑戦」に平均314秒(min23~MAX666)かかっていたが、3月には《斜面（園舎側）》から平均45秒(min19~MAX85)で登り、《丸太》《壁》《斜面（園舎側）》《ポール》など多様な降り口から降りるようになった(表2)。また、9月には【達成方法の模索】【挑戦の中断】が多く、【他児の取組に割り込む】こともあったが、3月には【接触】【挑戦】【達成】へと変化した(表3)。

(3)影響要因：年長児の登り方を参照しながら試行錯誤して【繰り返し挑戦】する姿(事例1)から、取組状況の異なる2名の相互作用と保育者の励まし等を通して(事例2)、【達成】へと変化する姿(事例3)が捉えられた。担任保育者によると、2名は日頃から仲が良く、積み木やボール遊び等で一緒に遊ぶことが多かったという。達成児Aにとって、年長児や挑戦児Bの取組の様子が刺激となっていた一方、挑戦児Bにとっては達成児Aの存在が挑戦の継続意欲につながったと考えられる。また、他学年の保育者の励ましの後【恐怖】の言語化が生じており(事例2)、3月には担任の居場所を気にする様子もみられ(事例3)、保育者に登り方を披露したり、自身の取組状況を説明したりする姿がみられるようになったことから、【他児の達成可能性】【鼓舞】等の言葉かけに加え、幼児の【挑戦】や【達成】を見守る間接的援助も有効だといえる。さらに、幼児の挑戦を安心して見守ることが可能な構造の遊具であったことも関連するといえる。

事例1 年長児が登る姿を見る (9月14日)

達成児Aは年長児が登っていく下で手前の丸太にまたがり【接触】、年長児が登る姿を見ている【他児の取組を見る】。年長の後に続き、丸太にしがみついでよじ登るが、滑ってしまう。歩くようにして途中まで行くが、着地して奥の左側の丸太にも挑戦する。手掛かりより上にはいけない。しかし、何度も丸太に足を乗せてバランスをとる。…中略…尻もちをつくも、再び歩いて登り、手掛かりをつかむまでいくが、バランスを崩す【繰り返し挑戦】。そこに挑戦児Bがくる。A児は着地して【挑戦の中断】、B児に場所を譲り、奥の丸太に移動するが、年長が来たので場所を譲り【他児に譲る】、年長児の登り方を見ている【他児の取組を見る】。B児はA児と年長児が登る姿を見てから【他児の取組を見る】丸太にまたがり、登り棒のようによじ登ろうとする。何度も飛びついたり、A児のように丸太に足を乗せようとしていたりするが、手掛かりまで手が届かない。先に手掛かりに手をかけて、足を上に持ち上げる方法も試している【繰り返し挑戦】。 ※以降割愛

事例2 「登れたー！」「でもここが怖いんだよ」(9月26日)

達成児Aは左側の丸太から足を乗せて歩くようにして登り、手掛かりに膝をかけ、立って登ることができる【達成】。A児の「登れたー！」【達成】に対して、挑戦児Bは支えの丸太にしがみつきて【接触】、「こっから登れない」【達成可能性】と言う。B児も左側の裏の丸太から手掛かりまでしがみつきて、A児に続いて左側の丸太に抱き着き、登り棒のようにしてよじ登り、手掛かりに肘をつく【繰り返し挑戦】。「達成児Aくん、達成児Aくんは？」【その他】とB児はA児を呼び、手掛かりで肘をついて止まる【達成方法の模索】。A児が「登った」【達成】と言うと、近くを通りかかった年長担任保育者に「あれ、いつのまに。昨日登れなかったけど今日登れてんじゃん。靴で？【他児の状況】すげー【称賛】」と言われる。B児も「あ、B君ももうちょっとじゃん【他児の達成可能性】、がんばれがんばれ【鼓舞】、いけそうよ【他児の達成可能性】」と言われる。B児は年長担任の言葉にうなずき、手がかりにまたがり、裏の丸太に足を伸ばして両足を絡めて滑り降りて着地する【挑戦の中断】と同時に、「でもここが怖いんだよ」【恐怖】とつぶやく。A児が壁から降りてきたので、B児と一緒に砂場へ向かう【挑戦の終結】。 ※前半部分割愛

事例3 「これ簡単だね」「ぼくもやる！」(3月11日)

達成児Aは下段に立ち【接触】、「これ簡単だね」【難易度】と言って手掛かりをつかんで上半身を手掛かりの間に膝を掛け、上部をつかんで立って登っていく【達成】。挑戦児Bは「ぼくもやる！」【意志】と言い、A児の隣の下段左側に立つ【接触】。B児は担任保育者がいる方向を気にして笑顔を見せ、左側を登り棒のようにして足を絡めてみるが【挑戦】、A児が登りきるのを待つ【他児を待つ】。A児が登った後に、B児は右側から手掛かりをつかみ、登り棒のようにしてよじ登り、膝を手掛かりにかけて立ち、素早く登っていく【達成】。

【】：行動ラベル「挑戦」(太字：行動内容)、二重下線：行動ラベル「他児との関わり」、〔〕：発話ラベル、下線：保育者の関わり

【結論】2名の男児は9月から3月にかけて取組む登り口の種類が増え、登はんの熟達に伴い、試行錯誤して挑戦する姿からより速く確実に登り降りする姿に変化していた。これらの変化の影響要因としては周囲への関心や気の合う友達との継続的な取組が、安全上の配慮としては幼児の挑戦を見守る保育者の援助及び環境構成の有用性が示唆された。

【今後の課題】本研究で対象とした挑戦意欲が高い幼児のみならず、挑戦に消極的な幼児等、より多様な個人特性をもつ幼児の取組の詳細を明らかにする必要がある。

引用文献：根橋杏美・砂上史子(2022) 幼稚園の登はん型遊具における幼児の「挑戦的活動」 幼児の利用実態と幼児同士の相互作用の分析 . 保育学研究, 60(2), 79-90.

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

こども環境学会2022年度第18回「論文・著作賞」受賞（2023年7月こども環境学会沖縄大会）
「園庭の登はん型遊具における幼児の利用実態とリスクテイキングの過程との関連」根橋杏美

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------